

国立国語研究所学術情報リポジトリ

もののかずをあらわす数詞の用法について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): Numeral, cardinal, number, quantifier 作成者: 加藤, 美紀, KATO, Miki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002101

もののかずをあらわす数詞の用法について

加 藤 美 紀

キーワード

数詞, 基数詞, かず, 数量詞

要 旨

本研究は、日本語の数詞（特に基数詞）における文法的用法について論じたものである。結果としては、これまでも指摘されている副詞の用法に関する新たな解釈と、従来の研究では論じられてこなかった用法を提示できた。具体的にいうと、前者については、確かに従来述べられているように、数詞が連用することは特色の一つとなっているが、さらに重要なことは、その数詞が、先行する名詞と組み合わせられているという点である。後者については、主に二つの用法を指摘できる。一つは、「子供が三人で遊んでいる」のような文における数詞についてである。この構文において、数詞は必ず主語（主体）のかずを示し、同時にその主語のあらわすものがグループであることを示す機能がある。もう一つは、「二人は黙って歩きつづけました」のような文における数詞である。これは、数詞の三人称代名詞的用法として提示した。

はじめに

数詞の研究は、従来、語彙的な側面では助数詞に関する研究、文法の側面では〔副詞的用法〕といわれているものの研究などがあるが、ほとんどこの二点に集中してきたといえる。しかし、もののかずをあらわす数詞を眺めてみると、実際には様々な構文パターンをもっていることに気がつく。この調査報告では、それらを提示し、数詞に関する諸問題をできるだけ広く見渡すことを目的とした。

今後それらの問題の一つ一つをさらに精密に研究する必要があるものの、現段階において、もののかずをあらわす構文のバリエーションを提示し、それらを比較検討したことは、今日の日本語文法の研究現場において、今までほとんど無関心といえるような数詞が、多くの問題を抱えていることに気が付く契機になりえるだろうという点で、意味のあるものになったのではないかと思っている。

研究方法について

研究資料として文庫本33冊から用例を集め、そのデータをもとに問題を分析した。本論中の用例の末尾には、出典の略称を丸カッコ内に記した。なお、出典の詳細は本文末に記載した。

1. 先行研究とこの調査報告の特徴

従来の研究をみてみると、山田(1936)が積極的に数詞の特殊性を述べて以来、森重(1958)や佐治(1969)、川端(1964)などがその用法の分析を試みているが、本論と比較すると、大局的な解釈であり、個別のデータに基づく細かい検証がなされていない点が指摘できる。その後から現在にかけては、奥津(1986)などの生成文法の立場による分析が中心となっている。この調査は、そのような数詞に関する大局的な解釈や生成文法的な立場を取らず、数詞を含む用例を実際に使用されている文から集め分類するという方法をおこなった結果、これまで指摘されてこなかった問題をいくつか発見することができた。例えば、日本語におけるもののかずをあらわす数詞は、文中で、連体・連用(いわゆる〔副詞的用法〕)だけでなく、単独で文の部分(主語や補語など)になってはたらく場合があることなどである。このように、新しい問題を提起すると共に、従来から議論されている問題についても、様々な構文のバリエーションの中で比較分析し、新しい解釈を試みた点が、本調査報告の特徴である。

2. もののかずをあらわす数詞構文のパターン

数詞を含む構文は、様々なパターンがある。以下は、その主な8つのパターンである。

(1)〔数詞の——名詞〕型

- 1 ある夜一匹の小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。(山椒)
- 2 百五十一人の生徒たちを相手に授業するよりもずっと素晴らしいことがあるのを女教師は知った。(ペン)

(2)〔名詞の——数詞〕型

- 1 団体客の一人が列車の通路に黒板を置き、ウィスキーを飲みながら、幽霊の絵を描いた。(中吊)
- 2 ゼットンはどこにでもいる目立たない怪獣の一匹だった。(ペン)

(3)〔名詞+…名詞の——数詞〕型

- 1 西沢家の居間に、今は浜中弓子、そして夕子と私の三人だけが集まっていた。(幽霊)
- 2 (略)あの謄本である。和知三郎と、その妻豊子、そしてわたしと武則の四人が記載されているはずだ。(愛を)

(4)〔名詞が／を——数詞——述語動詞〕型

- 1 港には漁船が三四十艘、綺麗に揃えて曳き上げてある。(伊豆)
- 2 オヤカタは、五反田の会社へ一升瓶のワインを二ダース届けてくれた。(桃仙)

(5)〔名詞(ハダカ格)——数詞〕型

- 1 (前略)ヨーカン一本がすべて自分のものであるとわかれると、急にケチになり、一ミリぐらいに薄切りにした。(素人)
- 2 私の父は、製缶工場で作業中にプレス機に左手の指三本を挟まれ、あわや切断かという大怪我を負って入院中だった。(真夏)

(6)〔名詞が——数詞で〕型

-1 新聞記者に変装した警官が八人で蠅たたきみたいに飛び掛った。(桃仙)

-2 僕らは四人で食卓についてコーヒーを飲んだ。(ダン)

(7) [名詞は——名詞と——数詞で] 型

-1 児島君は友だちと二人でやってきた。(無印)

-2 私たちは、国崎幸代と三人で、大学近くの、「結構安くていける」と、夕子が推薦した食堂で夕食をとっているところだった。(幽霊)

(8) [数詞は／が／を／に] 型

-1 僕が奥の部屋で着替えている間、二人はドアを開けたまま戸口に立っていた。(ダン)

-2 三人はようやく安心して泳ぎながら顔を見合わせてにこにこしました。(一房)

これらを観察した結果、かたちの上から、次の3つに分類することができる。

1. (1)～(5)にみられる、名詞と組み合わせさせて、その名詞のあらわすもののかずを示す場合(Ⅲ)

2. (6)(7)にみられる、デ格の数詞と、それに相当する数詞の場合(Ⅳ)

3. (11)にみられる、文中に単独で現れる数詞の場合(Ⅴ)

本論は以下、これらを主軸に進め、さらに特筆すべき点として、4. 数「一」に関わる特殊な用法について(Ⅵ)記述しておく。

3. 名詞と組み合わせさせて、その名詞のあらわすもののかずを示す数詞

3.1. (1) [数詞の——名詞] 型

この場合は「3つのリング」のように、数詞は名詞にかかって、名詞のあらわすもののかずを示している。

(8) 五六人の鉦夫が婆さんをいたわっていた。(伊豆)

(9) またそこに行く途中には柵で囲まれた六つの農場と、六つの門とがあるという事を、百姓から聞かされていました。(一房)

(10) ボストン・バッグの中から遠藤は、二、三枚のカードをとり出して私に示しました。(ユー)

この型は、二つの傾向を指摘することができる。一つは、主に小説などの地の文にあらわれて、会話文にはほとんどみられない型である点(表-1 参照)、もう一つは、主語や補語になる場合が多いという点である(表-2 参照)。

3.2. (2) [名詞の——数詞] 型あるいは [A>X] 型

この名詞句における名詞と数詞の関係は、名詞があらわすものが[全体(A)]で、数詞の示すかすがその[部分(X)]であるという構造をもっている。数概念上、A>Xの関係が成り立つため[A>X]型と表記した。

(11) 塀の上のアブサン(筆者注：ネコの名)は、外ネコの一匹を追いつめているようだった。

(アブ)

(12) 林氏は封筒のなかの書類の一通をわたしのほうにむけた。(愛を)

(13) やはり私はまだ若者の一員に入っているため進行が速いし熱も発するのだ。(そう)

(14) ビクターが主催している国際的なVTRコンテストがあって、ぼくはその審査員の一人であった。(時に)

以上の例は全て数「一」の例だが、現在、数「二」以上の例を收拾できていないため、それが特徴なのか、あるいは、そのような特徴がみられるのは、数「一」であることが原因なのか特定できていない。

3.3. (3) [名詞十…名詞の——数詞] 型あるいは [A+B+…=X] 型

この型では、[A+B+…]にあたるのが名詞の連続する部分で、その合計数を示す[X]が数詞という構造をもっている。つまり、3.2. では数概念の上で、[名詞のあらわすもの>数詞で示されるかず]の関係があったが、ここでは[名詞のあらわすもの=数詞で示されるかず]という関係になっている。

(15) その夜は新橋で売れっ子のT姐さんと先日逢った若いNちゃんの二人が宴席に上がった。(兎が)

(16) たまたま茶の間には僕と祖父の二人きりで、昼食に出前のざる蕎麦を食べることになった。(真夏)

(17) その店のカレーは辛口と甘口の2種類だけである。(中吊)

[A+B+…]にあたる名詞部分は、並列をあらわすト格が示されない場合もある。

(18) 共和主義者である村長さんは、村役場のかべを青、白、赤の3色に塗っています。(ペン)

(19) 北上で行った前回の文春文化講演会は十六年前で、その時は永六輔、笹沢左保、綱淵謙錠の三氏であったという。(時に)

3.4. (4) [名詞が／を——数詞——述語動詞] 型

3.4.1. 名詞と数詞の関係

(20) やがて、<山川物産>とペンキで書かれた倉庫の壁が見えた。倉庫は三軒並んでいて、その手前の広い空地には、すでにきのう運ばれて来た廃車が四、五十台置かれてあった。(真夏)

(21) フォートリエは、連作「人質」で知られる高名な画家だった。フォートリエの額には蠅の死骸が二匹へばりつき、そこから赤茶けた汁が二すじ下がっていた。(桃仙)

従来では、これらの用例は[副詞的用法]と呼ばれて研究されてきたものである。その考えに従うと、この章題の「名詞と組み合わせあって、その名詞のあらわすもののかずを示す数詞」には当てはまらない。しかし、そもそも数詞が示しているかずは、先行する名詞のあらわすもののか

ずである。そこで、〔名詞が／を——数詞〕という組み合わせに注目し、この構文を捉えなおしてみたいと考え、以下の用例に着目した。

- (22) お母さまは半熟を三つと、それからおかゆをお茶碗にはんぶんほどいただいた。(斜陽)
- (23) 明美は、部屋の隅にある小さな冷蔵庫からビール瓶を一本取り出すと、安っぽい盆に、グラスを二つと、湯飲み茶碗を一つ乗せて持ってきた。(中吊)
- (24) やがて書生がビールを二本とグラスをふたつ盆に載せて持ってきた。(ダン)
- (25) 彼は広々としたリビング・ルームに僕らを通し、大きなソファに座らせ、台所からブリモ・ビールを二本とコークを一本とグラスを三つ盆に載せて持ってきた。(ダン)

これらの例は、補語となっている名詞が等位接続するパターンであるが、そのとき、数詞はヲ格の名詞の直後に組み合わさってあらわれる。このことから、この構文にみられる数詞は、単に副詞的にはたらいっているだけでなく、連体修飾的にもはたらいっているといえることができる。

3.4.2. 〔名詞が／を——数詞〕部分と述語動詞の関係

(4) 型の構文が成立するには、〔名詞が——数詞〕の場合は自動詞、〔名詞を——数詞〕の場合は他動詞が述語となる。つまり、ここで重要な点は、〔名詞が／を——数詞〕に対して、述語動詞の格支配が直接的であることである。二格の名詞が、この型の構文になりにくいということは、従来の研究でも指摘されていることだが、原因については、はっきりとしたことを述べていない。しかし、述語動詞と直接的な関係をもつ名詞というのを考えてみれば、二格の名詞においては、あまりない点が指摘でき、その結果、用例もあまりみかけることができないのだといえる。次のような動詞「寄る」などが述語になれば、当然、この型の構文となることができる。

- (26) これからパーに一軒寄って一杯飲んだ場合に終電の時間は……。(コラ)

また、デ格やト格などの名詞のあらわすかずを示す数詞が、この型の構文になれないのも、同じ理由によるものと考えられる。

3.5. 〔名詞が／を——数詞——述語動詞〕型における間接対象の位置

3.5.1. 〔名詞が／を——数詞——名詞二——述語動詞〕型

補語(間接対象)は、〔名詞が／を——数詞〕部分よりも前に現れることもあるが、直後に現れることもよくある。その場合、〔名詞が／を——数詞〕の組み合わせを崩すことはない(崩れる場合は次の項で述べる)。また、直後に現れる場合は、二格の名詞であることがほとんどで、格形式の関係的な意味は、〔間接的な対象〕をあらわしていることが多い。

- (27) 「実は昨日の夜、この近所のスイミング・スクールで女の子がふたり鰐に食べられて死んだっていう話を聞いたんだけど、本当でしょうか？」(ダン)
- (28) そのとき郵便配達が来て白い封筒の手紙を一つ廊下に置いて行った。(山椒)
- (29) 夕刻、五百円玉を二十枚ポケットに入れて会社を出た。(やさ)
- (30) 埃まみれの荷台に青年がひとり坐っていた。(生き)

- (31) 私は、原田を呼ぶと、バケツに水を一杯入れて持って来いと言いつけた……。 (幽霊)

3.5.2. [名詞に——数詞——名詞が／を——述語動詞] 型

—— [名詞が／を——数詞] 部分が崩れる場合

これまで、[名詞が／を——数詞] が、一つの組み合わせをつくっていることを主張してきたが、このかたちが崩れる場合がある。つまり、数詞が名詞よりも前に現れる場合である。しかし、この崩れ方には、かなり明確なパターンがみられるので、[名詞が／を——数詞] が一つの組み合わせになっていると主張することに影響はない。そのパターンは、主に三つの傾向がある。(a) とりたて助辞やとりたて副詞をともなって数詞を強調する場合、(b) 補語（間接対象）が先に現れる場合、(c) 状況語が先に現れる場合である。この三つの特徴は、どれか一つが現れている場合もあるし、(a) と (b) あるいは (a) と (c) のように共にあらわれる場合も多い。

(a) 数詞を強調している場合

- (32) 棒のさきにもう一つ小さな棒がつけてあり、その小さな棒だけがクルクル廻って豆をたたくのだった。(桃仙)
- (33) うちの工場の社員の中にも、いままで五人ぐらい頭がおかしいなって入院したやつがおる。(真夏)
- (34) 祖父の家には十三匹ほどネコがいて、牡ネコはすべてに手術をしていたのではなかったろうか。(アブ)
- (35) 角帽の学生はライカを富士山に向け、三枚も四枚も同じ風景を写していた。
- (36) その家には、三四羽も雲雀を飼っている。(伊豆)

(b) 補語（間接対象）が先に現れる場合 — (6)

- (37) 「どや、まだそこに一枚、筵が敷いてある、」(おは)
- (38) 茶店の横手の広場に二台自動車が待たしてあった。(山椒)
- (39) 左の肺に二つ穴があいていて、しかも開放性だということです。(真夏)
- (40) 「あそこに一人、業界の裏側にすごく詳しい記者がいただろう。(略)」(ダン)
- (41) その人は少しかがんでそのまっ白な手で地面に一つ輪をかきました。(銀河)
- (42) 節子にも一人、腹心の友があった。(美徳)
- (43) 付近には三、四台、車が停車している。(ユー)
- (44) 僕の部屋には二つドアがついている。一つが入り口で、一つが出口だ。(ダン)
- (45) 「でも良い名前だよ。さっき調べてみたんだけど、東京都内にも二人ユミヨシさんがいた。(略)」(ダン)

この場合の補語（間接対象）は、格形式の関係的な意味として〔場所〕をあらわすものが多い傾向がある。

(c) 状況語が先に現れる場合

- (46) 一時間の間に二人、通りかかったサラリーマンらしい男が、あの敷石につまずいて転びそうになり、(幽霊)
- (47) 昼前のちょうどいい時間に一本特急があった。(ダン)
- (48) 時代は鍋一色。(略)社員食堂にも鍋が登場し、昼日なか、あっちで四人、こっちで三人、湯気をあびつつモツ鍋をつつく社員の姿が見られるようになる。(駅弁)
- (49) 近所のパブで一杯ビターを飲んで家に帰って寝るにはちょうど良い頃合である。(村上)
- (50) その時みよは縁側から庭の柿をみていた。まだ若木のきさはしで、今年はじめて五つほど実をつけたが、(小説)
- (51) 土曜日、最後の仕事を終わって帰ろうとすると、社長がギャラの入った封筒をくれた。「それとね、これあずかっているから渡しとくね」といって別に一枚封筒をくれた。(無印)

- (52) 彼女は最後にひとつつゆっくりと溜め息をついた。すごく長い溜め息だった。(ダン)

全体的にみると、主に二格の名詞と、その直後に現れる数詞は、独特のリズムを作り出していて、強い結びつきがあるようにも捉えられる。このことは、さらに次のような用例からも、推測できる(ただし、用例数は多くない)。

- (53) 「どうか今後、交番の方たち、用を足されるなら、拙宅の呼び鈴を鳴らして下さい。幸い便所は階下にも一つあります。(略)」(ユー)
- (54) 「はいはい」と返辞して、そのキヌちゃんという三十歳前後の粹な縞模様を着た女中さんが、お銚子をお盆に十本ばかり載せて、お勝手からあらわれる。(斜陽)
- (55) 「(略)照恵さん、酒呑んですすね」「はい、ビールをグラスに二杯ほど」(愛を)

(53) ～ (55) の例は、〔名詞が／を——数詞〕部分の間に二格の名詞があらわれているものである。しかしこの場合も、場所をあらわす名詞が先行し、その直後に数詞がおかれるという (b) パターンと基本的に同じである。このことから、場所をあらわす二格の名詞とその直後におかれる数詞というのは、語順の点から、一つのパターンであるといえそうである。

以上の結果と 3.5.1. の結果とを総合して考えると、二格の名詞が間接的な対象をあらわす場合、〔名詞が／を——数詞〕部分の前後におかれ、場所をあらわす場合は、その直後におかれるという傾向が指摘できる。

3.6. (5) 〔名詞 (ハダカ格) ——数詞〕型

ここでいう〔名詞 (ハダカ格) ——数詞〕型とは、以下のものを指す。

- (56) 弁当代わりに、さつま芋三本を新聞紙にくるんで学校にくる子供もいた。(駅弁)
- (57) パチンコ玉一個でドル箱百個になることだってある。(兎が)
- (58) 若いサラリーマン二人に「偉い」と言われているのは、中近東かアフリカで働く商社マンではなく、日本を捨てた赤軍派なのであった。(中吊)

この型は三つの特徴を挙げることができる。一つめは、この型の構造、二つめは、どのような

名詞と組み合わせるか、三つめは、この型の独自性という点である。

まず一つめの、この型の構造であるが、この〔名詞(ハダカ格)——数詞〕型は、名詞と数詞の間には、なにも入ることがなく、常に〔名詞——数詞〕のように組み合わせり、文中で、補語や述語、稀に主語にもなったりする(表-2)。その場合、この型は、一種の名詞句のようなものになっているといえるが、「3つのリンゴ」などのような一般的な名詞句にはみられない用法をもつ点で、名詞句であると言いきれないところがある。

(59) 「そこ机一つあいてるでしょ、そこで仕事してください」(無印)

(60) ますます幼稚度を増す日本の若者は、男女二人揃うとさらにはげしく幼稚化してまるっきり子供そのものに見えてしまう。(時に)

(61) マヨネーズが高価で珍しいものだったから、麦飯に少量のマヨネーズをまぜてかきまわし、醤油二滴落として食べた。(素人)

(62) ある日お互いガマンの限界がきて、出て行け、出ていかないの大きわざになり、モモヨ婆さんが風呂敷包み一つもってアパートを借りてしまった。(無印)

(63) 「ソーヤ先生が来てくれて注射二本打ったらずっとよくなった」(桃仙)

これらの例文では、この型が述語にかかっていることが指摘でき、その場合、この型は副詞句相当であるといえる。

またこれらの例には、潜在的な格の存在を指摘することができる。(59) (60) の例ではハダカ格からガ格に、(61) ~ (63) の例ではハダカ格からヲ格に変えることが可能である。しかし、そこで問題となるのは、どこに置きかえるかである。これはガ格ヲ格の両方にいえる。用例を〔名詞——数詞〕型と捉えれば、「注射二本を打ったら」(例 (63)) のように名詞句と捉えることができるが、一方で、先行する名詞をヲ格に変え、後に続く数詞をハダカ格に変えて「注射を二本打ったら」とすることも可能である。これらのような例を観察すると、〔名詞(ハダカ格)——数詞〕型が、もののかずを示しながら述語にかかるのは、上例にあるように、ヲ格相当の場合が主であることがわかる。その点で、例 (4) の〔名詞が／を——数詞——述語動詞〕型にかなり接近したグレーゾーンといえるだろう。そのようになる原因としては、この二つの型における名詞と数詞の結びつきかたが、共通しているためであると考えられるが、その詳細は次の項で、例 (1) の〔数詞の——名詞〕型の名詞句と比較しながら述べることにする。

次に二つめとして、どのような名詞句と組み合わせるかという問題であるが、この型は、(1) 型や (4) 型にはみられない、固有名詞や代名詞と組み合わせる用法があることが指摘できる。

(64) しかし私はK一人をここに残して行く気にはなれないのです。(ここ)

(65) 「君一人にできる筈はない。僕も行きます」(ユ一)

(66) 母は保険の外交員をし、私たち二人を学校へやってくれていた。(中吊)

(67) 私は知っている、彼等二人が論争をしない場合には、彼等はお互いに絶対の沈黙を続け、(山椒)

この場合、名詞のあらわすものと数詞の示すかずの数概念に注目すると、〔名詞のあらわすもの=数詞の示すかず〕の関係にあることがわかる。また、この関係は、例 (3) の〔A+B+…=

X) 型と同様であることから、(3) 型に近いといえる。さらに、指示詞がついた場合も、これと同様の関係にあるといえる。

(68) 「その若い男たち二人、サラリーマンに見えたけど」(中吊)

(69) そや、この子供ひとりのために、宿替へせにやならんや、(おは)

三つめは、これまで他の型との共通性ばかりを取り上げたが、この型の独自性はどこにあるのかという点である。それについては、かなり明らかにいうことができ、補語(間接対象、特に「道具」や「原因」を示すデ格)になるとき、現れることが指摘できる。

(70) なにかの本を読んでいたら箸一本で人を殺すことができるという。(時に)

(71) 小沢さんの家とぼくの家とは、薄い漆喰壁一枚で接していたので、母は声を落とし、
(真夏)

(72) 夫は炬燵で朝酒を酌んでいる。お銚子一本でまっ赤に染まってしまった。(やさ)

(73) 前の半生は庖丁一つで、海岸線の町々を渡り歩いていたのだ。(伊豆)

これらの例を(3) 型や(4) 型に置き換えることはできない。

3.7. (1) 型と(4) (5) 型の比較分析

ここでは、(1) [数詞の——名詞] 型と(4) [数詞が／を——数詞——述語動詞] 型・(5) [名詞(ハダカ格)——数詞] 型((3) 型に近いものは除く)におけるそれぞれの役割について、比較分析をとおして明らかにしていきたい。なお、(4) 型と(5) 型は、先行する名詞のかずをあらわしながら連用することができる点で共通するということを前項で述べたが、ここでは、この2つの型を同様のものとして扱うこととし、(1) 型と(4) (5) 型を対照しながらそれぞれの特徴を見出そうとおもう。

(1) 型と(4) (5) 型について、日常で使用されている場面を観察すると、明らかな使い分けがされていることに気がつくだろう。例えば、食べ物屋で何か注文をする場合、日本語母語話者は、ふつう、「ビールを三本と、枝豆一皿ください」というような言い方をする。このとき、「三本のビールと、一皿の枝豆ください」のようなかたちをとらない。また、料理などのレシピをみても、「塩バター120 g、玉子2個、赤砂糖大さじ1、これに、小麦粉120 g(中吊)」などのように表現される。ところが、本や映画のタイトルには、(1) 型が多くみられ、「三匹の子豚」「二人のロッチ」「七人の侍」などみることができる。仮にこれらを(4) や(5) 型に置き換えて「子豚が三匹」「ロッチを二人」「侍七人」とすると、日本語母語話者には、タイトルとしては落ちつかない感じがするだろう。特に(4) 型は、動詞と結びついて完成する形ということができるので、このように現れると、聞き手に不安感を与える目的ならば効果はあるかもしれないが、そうでなければ一般的な用法とはいえないだろう。また、物語の冒頭は、ほとんど必ず(1) 型の名詞句のかたちで現れる傾向がある(例「むかしある国のあるところに、ひとりの裕福な百姓が住んでいた。この裕福な百姓には、三人の息子——軍人のセミョーンと、ほてい腹のタラスと、ほかのイワンと、ほかにマラーニヤという生まれつき唾の娘とがあった、『イワンのほかとそのふたりの兄弟』冒頭より)。

以上の使い分けの原因を考えるために、それぞれの構文における、名詞と数詞が何をどうあら

わしているのかという点に着目した。

まず、数詞についてみると、どちらの構文においても、数詞の示すかずというのは、「言語の世界がもつ数としての自然数は、所詮量的な数でしかない」(川端1967)という側面が認められる。当然のことだが、これは、数詞が副詞的用法をもっていることについての説明(つまり、程度副詞相当にはたいているという考え)としてだけではなく、連体する数詞についても同様にいえることである。次に名詞を観察してみると、(1)型の名詞は、数詞と一般的な修飾関係を結んでいる。つまり、数詞の示すかずだけ存在するものを、個別的に指示している。一方、(4)(7)型の名詞は、一見して明らかのように、数詞は名詞のあらわすもののかずであるにも関わらず、連体形式をとっていない。文中で、数詞は、ハダカ格というかたちをとって示すように、積極的な格関係を示さない、いわばニュートラルな状態になっている。その結果、名詞は規定されないので、数詞の示すかずだけ存在するものを一般的に指示することになり、また、数詞は単に量を示すだけとなるといえる。そして、この数詞のニュートラルな状態というのが、後続する述語動詞にもかかることができる要因となっていると考えられる。なお、ここでいう個別的あるいは一般的とは、次のようなことである。例えば、「私は本を読むことが好きです」といった場合の「本」と「昨日私は本を読みました」といった場合の「本」では、前者は一般的に「本」と述べているのに対し、後者の「本」は、実際に何かしらの本を指し示すことができ、個別的に「本」と述べているといえることができる。

以上で述べた違いが、日常の使い分けの根拠となっているといえるだろう。料理の材料などでは、例えば玉子のひとつひとつに着目する必要はなく、その量が単に重要な点である。そのために(4)(7)型を用いる傾向があると考えられる。しかし、タイトルや物語の冒頭では、かずも重要だが、それと同時に名詞があらわすものの個々が重要である。そのため、名詞が個別的にモノを指し示すことができる(1)型を用いる傾向があるといえる。

表一 1 会話文／地の文における出現率

	数詞の一名詞型 (%)	名詞—数詞型 (%)	名詞が/を数詞—述語型 (%)
会話文	10(3.4)	37(36.3)	62(23.5)
地の文	286(96.6)	65(63.7)	202(76.5)
合計数	296(100)	102(100)	264(100)

注) データは文庫本6冊(巻末資料28～33)から取ったものである。

表一 2 格形式とその関係的な意味における頻度表

	形式の関係的な意味	数詞の一名詞型	名詞—数詞型
ガ 格	運動の主体	174	5
	性質のもちぬし	13	—
	原因	1	—
	能力の対象	5	—

	感情の対象	1	2
	(受身文で) 動作の主体	—	—
	運動の主体のかずかつ様子	—	22
	小計 (%)	194(48.5)	29(19.2)
ヲ格	動作の直接的な対象	138	30
	動作のかかわる場所	2	—
	形式的な意味の動作とくみあわさる	3	—
	小計 (%)	143(35.6)	30(19.8)
ニ格	動作の間接的な対象	37	2
	動作・状態のかかわる場所	5	—
	補助的な単語とくみあわさる	7	6
	(受身文で) 動作の主体	—	1
	小計 (%)	49(12.3)	9(6.0)
デ格	道具	4	2
	材料	1	1
	ウゴキのなりたつ場所	3	—
	ようす	2	3
	原因	4	9
	運動の主体のかずかつ様子	—	19
	小計 (%)	14(3.5)	34(22.5)
ハダカ格	動作の直接的な対象		29
	運動の主体のかずかつ様子		9
	運動の主体		11
	小計 (%)		49(32.5)
	合計	400(100)	151(100)

注1) データは文庫本27冊(巻末資料1～27)から取ったものである。

注2) 格形式の関係的な意味については、高橋(1999)を参考にした。ただし、[リンゴ3つ]型にみられる[動作の主体のかずかつ様子]というのは、この論で新しく指摘した点である。

4. デ格の数詞と、デ格相当の数詞

4.1. (6) [名詞が——数詞で——述語動詞]型

この型は、デ格で積極的に格関係を示す場合(a)だけでなく、同様のものに、名詞がハダカ格の場合(b)、数詞がハダカ格の場合(c)名詞と数詞のどちらもハダカ格で現れる場合(d)がみられる。しかし、それらは皆、[名詞が——数詞で——述語動詞]構造を内包していると考えることができる。

(a) 名詞が——数詞で —— (8)

- (74) 近所のおばさんたちが二、三人で井戸端会議をしていると、(無印)
- (75) 朝に我々はまた同じ部屋に集まって三人で黙々とひどいコーヒーを飲み、パンを食べた。(ダン)
- (76) 私たちは三人でキャッキョ騒ぎながらダイヤモンド・ゲームをしたり、トランプをしたりしていた。(無印)
- (77) 「いや放さん。僕は訴えようと思うんだ。消防の奴が四五人で、僕を袋叩きにしがったんだ。きみ、証人になって下さい」(山椒)

(b) 名詞——数詞で

- (78) 時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へはいったついでに、そこに坐つて話し込むような場合もその内に出て来ました。(ここ)
- (79) 女一人で三百キロの荷物持ってなんで五千メートルのところを旅するのか——。(時に)
- (80) (略) 満員電車の中で大声で歌を歌わせられたり、下級生七、八人で脛をむき出しにして並ばされ、上級生がバットで叩いて、脛の木琴なんてのもあった。(兎が)
- (81) 「(略) それが済んだらわたくしたち三人で、栃尾の温泉へ保養にゆきたいと思いますの、そのおさそいにあがつたのですけれど」(小説)

(c) 名詞が——数詞 —— (9)

- (82) サルをだきながら、藤本は道子が一人、ハミングを口ずさみながら、軽く足を動かしているのを盗み見た。(ユー)
- (83) 確かに考えてみれば、十二か十三の女の子が夜の十時にホテルのバーで一人ウォークマンを聴きながら飲み物を飲んでいるなんて、不思議な光景だった。(ダン)
- (84) 月曜日の西武新宿線はガラガラだった。私が座った席のむかいで、七十歳くらいのお婆さんが二人話をしている。(兎が)
- (85) Mの地所では東京から来た大工が三四人せっせと働いていた。(和解)

このタイプは、かたちの上では(4)型の構文のようだが、数詞の示すかずは、主語である名詞のあらわすものにしか関係しておらず、さらに、潜在的な格を考えると(6)型に相当するものと解釈でき、この項に位置付けた。

(d) 名詞(ハダカ格)——数詞

- (86) すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽を被ってやって来た。(ここ)
- (87) 直治ひとり、先生とお供の看護婦さんを送って行って、(斜陽)
- (88) 「あなたって何も不安がないのね。私一人不安を持ってびくびくしていなければならぬのね」(美德)
- (89) あの横手の細い家で、親子三人枕ならべて寝にやならんや、(おは)

このタイプは、かたちの上では（５）型と同じであるが、潜在的な格を考えると、（６）型に相当するものと解釈でき、この項に位置付けた。

これらの例の特徴として、数詞は常に主語（動作主体）である名詞のあらわすもののかずを示している点があげられる。また、数概念上は、〔主語となっている名詞のあらわすもの＝数詞の示すかず〕という関係が成り立つ。つまり、数詞の示すかずが名詞のあらわすもの全員ということになる。そこで、「二人で」「三人で」などは、意味的に「みんなで」「全員で」などに近づき、格関係の意味としては〔動作の様子〕相当になると思われる。

さらに、数詞の示すかずが「みんなで」「全員で」と同じような意味をもつ、ということをも〔主語となっている名詞のあらわすもの＝数詞の示すかず〕という式の「数詞の示すかず」に代入すると、主語となっている名詞のあらわすものは、共同で動作をするグループであるということができる。

(90) 僕のまわりではごく当たり前の都市における人々の営みが続けられていた。恋人同士が小さな声で語り合い、ビジネス・マンが二人で書類を広げて数字を検討し、大学生が何人が集まってスキー旅行やらボリスの新しいLPやらについて話していた。(ダン)

(91) バーは混み合っていた。カウンターで若い女が二人で酒を飲んでいた。(ダン)

この型のあらわす意味が、共同で動作をするグループであることが明らかなことは、（１）型や（７）型などに置きかえてみると一層よくわかる。例（95）を置き換えて見ると、

(95) -1 二人の若い女が酒を飲んでいた。

(95) -2 若い女二人が酒を飲んでいた。

上の２つの例は非文ではないが、複数人の「若い女」が一緒にいるのかそうでないのかが不明な文になってしまう。

以上のことから、この構文にみられる「二人で／三人で」などは、主語となっている名詞のあらわすものが、共同で動作をするグループであり、かつその構成員数が何人であるのかを示し、格形式の関係的な意味は〔動作の様子〕相当であるということが出来る。それらの点を満たせば、ヒト、モノに関わらずこの構文になりえると考えられるが、実際に用例を集めると、数詞が人のかずを示している場合ばかりが集まるので（というのも、日常では、共同で何かをするという条件にあてはまるのが、人ぐらいしかいないためであろう）、基本的には、ヒトのかずに関する表現の構文であるということができるだろう。

4.2.（７）〔名詞は——名詞と——数詞で〕型

これは、3.3. で述べた（３）の〔A+B+…=X〕型と似ているが、主語となっている名詞のあらわすもの（S）と、並立する名詞のあらわすもの（A+B+…）の合計が、数詞（X）で示される。この構文における数概念を式で示すと次のようになる〔S+（A+B+…）=X〕。また、文脈上明確な主語は省略される場合もある。

(92) これから直治がお母さまとお二人で水入らずで暮らして、そうして直治がたんとたん

と親孝行をするといひ。(斜陽)

- (93) オトウサンが帰ってくるまで、わたしは武則とふたりでずっと家のなかにとじこもっている。(愛を)

- (94) M子とK青年と三人で六本木通りを歩きながら、「じゃ一曲だけ歌って行こうか」と私が言い出すと、(兎が)

- (95) 嫁して来てから良人と二人きりで向きあうのはそれが初めてである。(小説)

この型における数詞は、4.1. と同様の〔共同で動作をするグループ〕であることを示す用法の場合が最も多くみられるため、この章の下位分類に位置付けた。それ以外にも用いられることがあるが、今のところ、用例は次の二例しかみることができなかった。

- (96) 私は父と二人きりになった。(中吊)

- (97) (略) 姉さんと二人きりの夜に自殺するのは気が重くて、とてもできそうもなかったのです。(斜陽)

5. 文中で単独で現れる数詞

5.1. (8)〔数詞は／が／を／に〕型

これは、数詞が単独で主語になったり補語になったりする場合である。

- (98) やがて二人は丘を登って右に曲がろうとすると、そこに牛が一匹立っているのに出会いました。(一房)

- (99) 狐はまだ網をかけて、樺の木の下に居ました。そして三人を見て口を曲げて大声でわらいました。(銀河)

- (100) けれども、父は二人に逢おうとはしなかった。(真夏)

これらの数詞「二人」や「三人」が指し示しているのは、既出の人物たちである。つまり、ここの主な役割は、文中で、なにものかのかずを示すことよりも、モノを指し示すところにある。このような用法は人称代名詞と似ている。仮に、上の例に現れた数詞を人称代名詞に置き換えるならば、「彼らは」や「彼らを」といった三人称代名詞が可能であり、この点から、数詞が代名詞的に機能しているということができよう。ところで、三人称代名詞の用法には、かずが明確で、かつ特定のグループを指し示す場合と、かずの不明確な不特定の複数を指し示す場合とがある。ここで指摘した用法と共通するのは、かずが明確な特定のグループを指し示す場合の三人称代名詞である。次に挙げた例は、三人称代名詞が、かずの不明確な不特定の複数を指し示す場合である。

- (101) 翌日、風邪も引いとらんのに大きなマスクをして出勤した。バスの中でも乗客が俺の顔を胡散臭げに眺めているような気がしてならん。彼らがひろげた朝刊にはもちろん、馬鹿でかい活字で厚生大臣の孫の誘拐事件が掲載されている。(ユ一)

- (102) 彼女等は獣のように、白い裸で這い回っていた。(筆者注:冒頭の一文)(伊豆)

- (103) しばらくの間、週刊誌やTVやスポーツ新聞が彼の死を食い荒らしていた。彼らは甲

虫みたいに腐肉をとともうまそうに齧っていた。そんな見出しを見ているだけで僕は吐き気がした。彼らが何を書いて何を言っているかは見なくても聞かなくても想像がついた。僕はそういう連中をひとりひとり絞め殺してまわりたかった。(ダン)

以上の例にみられる「彼ら／彼女ら」が、数詞で現れるような場合はない。数詞が単独で現れて代名詞的に機能する場合は、かずが明確な特定のグループである。

さらに、ある特定のグループであるということについては、次のような指示語に修飾されることから指摘できる。

(104) この二人は事務所で一緒になってもたがいにライバル意識を持ちあっているらしくほとんど口もききません。(ユー)

(105)「その三人はうろうろしながら、ぶつぶつ言ったり、考えごとをする。まあ、そういう話だ」(ベン)

(106) 言い終わるや否やこの三人を死ぬほど嫌っていた連中は言葉通り三人をノックアウトしてしまったのです。(ベン)

(107) 私は微笑んで口をはさんだ。黙っていては、かえってこのお二人に失礼なことになりそうだったのだ。(斜陽)

ふつう、「この」「あの」「その」などは、「この学生」などのように、単数・複数の不明なヒト名詞などにかかって、その名詞のあらわすものが、単数であることを示す。しかし、ここではそのような指示語「この」「あの」「その」が、複数をあらわす「二人」「三人」にかかっている。これはつまり、ここでの数詞「二人」「三人」などが、一つのグループであることを示していると考えられる。ここでは、このような数詞の用法を代名詞的用法とよんでおく。また、これは日本語における指示詞の用法という点からいうと、複数のものから構成されるものをあらわす名詞にかかる際、それが、ある特定の一つのグループであるような場合は、そのグループをひとかたまり、あるいは一つと捉え、単数扱いするということが指摘できる。しかし、この分析を進めることは、数詞の問題から離れてしまうので、ひとまず置いておくことにする。

では、以上のような代名詞的な数詞は文中のどのような部分に出現するのか、その傾向を以下の表にまとめた。

表—3 単独で文の部分となる場合の出現率

	数	一	二	三以上	用例合計数 (%)
ハ (主語)	ヒト	20	194	29	243(65.2)
	ヒト以外	9			9(2.4)
ガ格 (主語)	ヒト	19	42	5	66(17.7)
	ヒト以外				
ヲ格 (補語)	ヒト		27	4	31(8.3)
	ヒト以外	5			5(1.3)

ニ格	ヒト		17	2	19(5.1)
(補語)	ヒト以外				
全合計					373(100)

注1) このデータは、文庫本33冊（巻末資料1～33）から取ったものである。

注2) 「ハ（主語）」とは、ハによるガ格のとりたてを意味する。

この表では、数詞の示すかすが、ヒトのかずかヒト以外のかずかという分け方をした。というのも、日本語における複数表現は、ヒトとモノとで用法が異なることがしばしば見られるので、それを考慮したためである。結果的には、ヒトのかずに限らずみられる現象であることがわかったが、用例数からいうと、ヒトのかずの例の方が圧倒的に多い。また、この用法は、主語になることが多いという傾向がみられる。

大きな特徴としては、ヒトのかずを示す数詞が、数「二」や「三以上」で、代名詞的にはたらく場合、ほとんど必ず三人称代名詞であるという点が挙げられる。この点から、数詞が完全に代名詞の役割をこなしているとはいいいにくく、用法にはかなり制限があると考えられる。

以下に、実際の用例をみながら、表の項目に沿って個々のケースを観察していく。

5.2. 数「一」

「ヒトツ」や「ヒトリ」という数詞が、代名詞的用法として用いられる場合、常に、複数あるうちの一つである場合に限られる。

5.2.1. ハによるガ格のとりたての場合

ヒトの場合の「ヒトリ」と、ヒト以外の場合の「ヒトツ」などは、どちらの場合も同類のモノゴトとの対比において用いられる、とりたて形式のハである。多くの場合、先に同様の2つのものが提示され、次にそれぞれをさらに詳しく説明する場合に用いる。

(108)そして二個の岩石は、殆ど同時に谷底の赤土の上どころがり落ちて、一つはワルツ踊りをしながら自ら倒れ、他の一つは土の中に半分ほどめり込んだ。(山椒)

(109)遠藤の説明によると軽井沢族には戦後、二つの派閥が形成されたとのこと。一つは戦前、戦中にかけて軽井沢に避暑に来ていたが、終戦と同時に斜陽族となり、自分の土地や別荘を売り払わねばならなかった斜陽派。もう一つは、そうした斜陽派にかわって、戦後、別荘を買った新興派。(ユー)

(110)途中で人が二人死んだ。一人はメイで、もう一人は片腕の詩人だ。(ダン)

(111)昔トゥロンというフランスのある町に、二人のかたわ者がいました。一人はめくらで一人はちんばでした。(一房)

5.2.2. ガ格／ヲ格の場合

現在段階では、ガ格はヒトのかずの例のみ、ヲ格はモノのかずの例のみが集まったが、それが

特徴であると主張するには用例数が不十分である。かなり明確な特徴としては、ガ格の「ヒトリ」やヲ格の「ヒトツ」は、複数存在する中のヒトリ／ヒトツという意味を包含していることが挙げられる。

ガ格の「ヒトリ」の例

- (112) そしていきなり近くの人たちへ、「何かあったんですか」と叫ぶようにききました。
「こどもが水へ落ちたんですよ。」一人が云いますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。(銀河)
- (113) 「なんだこのぶざまは、町のまん中にこんなものは置いて置けやしない」と一人が申しますと、「ほんとうだ、クリスマス前にこわしてしまおうじゃないか」と一人がほざきます。(中略)「こわせこわせ」「たたきこわせたたきこわせ」という声がやがてあちらからもこちらからも起こって、(一房)
- (114) 都内の高級ホテルのロビーを張って、売春をしていると思える女を二、三人警察にひっぱったんです。そしてあなたに見せたのと同じ写真を見せて、しめあげたんです。一人が口を割った。(ダン)

ヲ格の「ヒトツ」の例

- (115) (筆者注：チョコレートが既述されて)「さあたべてごらん」その大きな人は一つを植夫にやりながらみんなに云いました。(銀河)
- (116) その雑誌はすべて裏向けにされてあったので、私は一冊を手に取り表紙を見ました。(真夏)
- (117) 骨は全部で六体あった。ひとつを除けばどれも完全な人骨で、死んでから長い時間が経っていた。(ダン)

ガ格のヒト以外という例では、指示語に修飾されている場合のものが数例集まっている。しかし、それらには、複数の中の一つという意味はない。

- (118) たのめば看守が修養の本を持ってきてくれ、げんにその一冊があるのだが、とても読む気になどなれない。(どこ)
- (119) もし、この一皿が二百円だとしたら五皿で十分おなかが一杯になったにちがいない。(駅弁)

5.3. 数「二」と「三以上」

日本語には、両数などがあることを考慮して、数「二」と「三以上」を分けて用例を収集したが、用法上の特別な差異は認められなかったので、まとめて扱うことにする。

5.3.1. ハによるガ格のとりたて／ガ格の場合

既述したように、この場合、代名詞的にはたらく数詞は、全て三人称代名詞にあたるという特徴がある。また、数詞の示すかずは、動作主体のかずを示していることから、述語動詞のあらわす動作をしたり状態をつくりだすグループであるということが出来る。その点で、〔名詞が——数

詞で」型を典型とする、「共同で動作をするグループ」と共通する。

ハによるガ格のとりたての数「二／三以上」の例

- (120) 二人はカウンターの、少し奥寄りの席に腰をおろした。(やさ)
- (121) 教習所で偶然、山川夫人と顔が会うことがある。そんな時、二人はいかにも親しげな友だちのように慰めあったり、励ましあったりする。(ユー)
- (122) 僕が出発するとき、三人は外に出て見送ってくれた。(ダン)
- (123) そのうち四人は笑い出し、ホット・コーラやて、ホット・コーラやて、と互いに肩を叩き合って奇声をあげた。(真夏)

ガ格の数「二／三以上」の例

- (124) こうして二人が海岸の石原の上に立っていると、一艘の舟がすぐ足もとに来て着きましたが、中には一人も乗り手がありませんでした。(一房)
- (125) そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど擦でもするようにぼかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのです。(銀河)
- (126) しかし、二人が暫く五目並べをやっていると、女たちが橋を渡ってどんどん二階へ上って来た。(伊豆)
- (127) 十分程待つと若い三人が頂上に辿りついた。(伊豆)

5.3.2. ヲ格／二格の場合

この場合、代名詞的な数詞は、ある特定のグループ(波線部)であることが指摘できる。

ヲ格の数「二／三以上」の例

- (128) 妹たちが来たとき弥生はちょうど独りだった。(略) 二人を自分の部屋へみちびいた弥生は縫いかけていた物を片つけ、縁側に面した障子をあけた。(小説)
- (129) そのように一つとなった二人ゆえ、どんな力も二人をひきはなすことの出来るはずはないと、(略)(伊豆)
- (130) 「先生。友だちですけん。これが義明。次郎。文吉」健三は三人を紹介すると「さあ、はよきなせ。ええ席が少ないけん」(ユー)
- (131) 言い終わるや否やこの三人を死ぬほど嫌っていた連中は言葉通り三人をノックアウトしてしまったのです。(ぺん)

二格の数「二／三以上」の例

二格の格関係の意味には、「ナル」「スル」などの動詞と組み合わせり、動作の内容を詳しくあらわす場合がある。ここでは、代名詞との交換性、共通性が問題の中心なのでそれらを対象からはずした。

- (132) 英男は、その佐藤という夫婦を、休日以外に見たことはなかった。(略)「こんなに早くに、珍しいですね」英男は二人に言って、テーブルに水を運んだ。(真夏)
- (133) まさか、お客を台所の横の六畳に寝かせるわけにはいきませんから、我々は二階の六畳を二人に引き渡しました。(ユー)

(134) これまではその二人の間にディック・ノースがいた。でももう今はいない。ある意味では僕が二人に対面している。(ダン)

(135) 彼ら台湾人三人は、頭をかしげながらずいぶんながいあいだ相談していたが、とうとうさじを投げたようだった。それでも異国でうける親切はありがたかった。わたしは三人に丁寧にお礼をのべて、とりあえず部屋にひきかえず(愛を)

5.4. 代名詞的用法の連体修飾

これまでは、ガ格・ヲ格・ニ格を中心にみてきた。ここでは、代名詞的な数詞が連体修飾する場合をみていく。

(136) もちろん、今日は三人の誕生日なんかではありませんでした。(ベン)

(137) 実際、男は軽々と女を背負うと、歩いて行った。二人の姿が、夜の中へ消えて行くと、(略)(幽霊)

(138) 私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生まれ出たともいえる二人の恋愛については、先刻いった通りであった。(ここ)

(139) 父親は一人で興奮していた。母親は洗濯物をたたみながら、バーカ、というような顔をして、「あんなもの誰もさわりやしませんよ、ねえ」と私にむかって言った。私は二人の子供という立場上、どっちにつくこともはばかれたので、(無印)

数詞の代名詞的用法の連体形は、修飾する名詞のあらわすもののかずを示すわけではないので、修飾される名詞は、ヒト名詞やモノ名詞に限らず、抽象名詞などの場合もある。また、形の上では、例(1)の「数詞の——名詞」型と同じになることが指摘できる。例えば、例(143)にみられる「二人の子供」という名詞句における数詞は、「父と母」を指し示している場合も、(1)型で、後続する名詞「子供」のかずを指し示す場合も同形になる。しかし、このように同形になるものは極めて稀である。

6. 数「一」のもつ特殊な用法

ここでは、単にかずを示すことから少し離れた数詞、数「一」に関する用法について分析を試みることにする。数「一」は、二以上のかずと比べ、その用法において非常に特殊な位置を占めている。数「一」は「二」以降のかずと異なり複数ではないことや、かずの始め、つまり最も少ないかず(ここでいう「かず」は、数学上の厳密に定義された用語として用いているのではなく、日常的な「かず」である)であるために、いろいろな意味に用いられる場合がみられる。

6.1. 「数詞の——名詞」型にみられる特殊な数「一」——冠詞的な機能

次の例から、日本語においても、「一」を用いて冠詞的(不定冠詞)な働きをする場合があるということが出来る。

(140) そしてこちら側にいるのは、母親ではなく、一人の女であった。(美徳)

(141) 私は今私の前に坐っているのが、一人の罪人であって、不断から尊敬している先生で

はないような気がした。(ここ)

(142) 樋の口からほとばしり出る水の棍棒は、滑らかな半円を描きながら一個の瀑布であった。(山椒)

(143) 節子をはじめて菊夫を、どこかの孤児を眺めるように、純然たる一人の子供として眺めている自分に気がついた。それは堅固な、犯すべからざる一つの存在だった。(美徳)

この場合の数「一」は、名詞のあらわすものの数量というよりも、名詞のあらわすものを一般的に指し示すはたらきをしていると考えられる。このことから、不定冠詞的にはたらいっているといえることができる。また、述語部分に現れるのが、もっともよくみられる例だが、それ以外にもある。

(144) 京都の下鴨に一軒の寿司屋がある。(生き)

(145) ある日、一軒の店で注文し、出来上がるのを待っている間に珍妙な光景を見た。一人のコックさんが飛んでくる蠅を包丁で切っているのだ。(中吊)

(146) 「帰るところがある、というのはいいもんですよ」と彼は、私に言った。彼、というのは一人のカメラマンで、私の昔からの友人である。

これらの例が、名詞のあらわすもののかずを単に示しているのではなく、不定冠詞的にはたらいっていると考えられる理由として次のことが考えられる。もし、それらが純粹にかずを示しているのであれば、細かいニュアンスが変わるものの、〔名詞——数詞〕型や〔名詞が／を——数詞——述語動詞〕型に置き換え可能なはずである。しかし、置き換えると、文の意味が完全にかわってしまう。以下に置き換えた場合をみってみる。

*1 京都の下鴨に寿司屋が一軒ある。

*2 ある日、店一軒で注文し、…

*3 彼、というのはカメラマン一人で、…

これらが、オリジナルとどの点で異なるのかというと、*1では、下鴨には寿司屋が一軒しかないような意味になってしまう。*2では、動作のかかわる場所を意味する場合のデ格だが、名詞のあらわすもののかずを示す場合の〔名詞——数詞〕型は、3.4.2.で述べた理由により、成立しないので非文となる。*3では、〔aはbである〕という構文であるが、bがaの属性を示す場合、bに、名詞のあらわすもののかずを示す場合の〔名詞——数詞〕型がおかれるのは、論理的にも文法的にも非文である。なぜなら、その場合の〔名詞——数詞〕型は、(4)の〔名詞が／を——数詞——述語動詞〕型にちかく、副詞句となっているためである。

以上の点から、日本語にも、英語などヨーロッパ諸語にみられるような冠詞的な「一」の用法があるといえるだろう。

6.2. 〔名詞——数詞〕型における特殊な「一」

この場合の数「一」は、「先行する名詞のあらわすものただそれだけ」といった意味として用いられる。数「一」はそもそも、かずの中では最も少ないので、「名詞のあらわすものそれだけ」の意味になりやすいが、デ格の場合では、ほとんどのものが「たったそれだけ」のように少ないこ

とを強調する気持ちを仄めかす。(このことは、数「一」に限ったことではなく、デ格的〔名詞——数詞〕型の特徴である可能性が考えられるが、現在、「一」以外のかずの用例が充分に集まっていないことから、ここでは、「一」に関してのみ述べることにする)

(147) 今の波一つでどこか深いところにながされたのだということを、私たちは言い合わさないでも知ることができたのです。(一房)

(148) 全く、吾八はこの宿に八年で、五十に近い。前の半生は包丁一つで、海岸線の町々を渡り歩いていたのだ。(伊豆)

(149) おばあちゃんの話によると、兩人とも猿股一枚で、あぐらをかいて、まるで博奕打ちのようだったそうです。(ユ一)

このような用法は、抽象名詞と組み合わせることができ、その場合、さらに数概念から離れた意味を確立している。また、その場合は特にデ格に限らずみられる。

(150) 愛するものの将来に万一のことがあってはならぬ、その恐れひとつでお石は自分の幸福を捨てた、(小説)

(151) 「君の気分だって、私の返事一つですぐ変わるじゃないか」(ここ)

(152) ローザが新しい経済学にたよらなければ、生きておられなかったように、私はいま、恋一つにすがらなければ、生きて行けないのだ。(斜陽)

(153) 「あなたはこの加内の家で下男や下婢が使えると思いますか」「それはお義兄さまのお考え一つですわ」

抽象名詞と組み合わせあった場合、「フタツ」「ミツ」の例をみることはほとんどない。そのため、これらの「ヒトツ」は「二」以上の数概念と対立したかずではないと考えられ、ほとんど完全に数概念から離れて「先行する名詞のあらわすものそれだけ」といった意味で用いられていると思われる。

6.3. 「ヒトツ」の陳述副詞的用法

この場合の「ヒトツ」は、必ず「ヒトツ」というかたちで現れ、意味の面では、一応数概念を残しているもの(158)～(160)と、完全に数概念から離れた意味のもの(161)～(163)とがある。

(154) 「次の飛行機で帰るんだったら、ひとつお願いがあるんだけど」(ダン)

(155) 「—— 一つ、うかがいたいのですが」と、私は言った。(幽霊)

(156) 先生の話のうちでただ一つ底まで聞いたかったのは、人間がいざという間際に、誰でも悪人になるという言葉の意味であった。(ここ)

(157) 「毎日つらいでしょう。きょうは一つ、この材木の見張り番をされていて下さい」(斜陽)

(158) 「ひとつここは僕に任せてくれませんか？決してあなたにそのことで負担はおかけしませんから」(ダン)

(159) 「それ、こいつをかけておくととんぼでも蜂でも雀でもかけずでも、もっと大きなやつでもひっかかりますぜ。それを集めて一つ動物園をやろうじゃありませんか。」(銀河)

これらの「ヒトツ」はデキゴトにかかっているが、デキゴトの中には、「お願いすること」「うかがいたいこと」「聞きたかったこと」などのように数えられるものと、「材木の見張りをする事」「任せてもらうこと」「動物園をやること」のように「ヒトツ」「フタツ」と数えられないものがある。しかし、どちらの場合も、かずが問題ではなく「ちょっと～する」といった意味をあらわしている。

6.4. 「同じ」という意味をあらわす「ヒトツ」

この用法は、必ず「ヒトツ」という形で名詞(主に補語となっている名詞)と結びつき、複合語をつくる。しかし、その結びつきかたは、意味からみると、修飾関係に相当しているといえる。

(160) その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起きしたものです。(ここ)

(161) 二人は、一つ傘をさしていた。(美德)

(162) エビ天も蕎麦もツユも、一つ屋根の下、親子三代和気あいあいといっしょに暮らしている。(駅弁)

(163) 明日が日にもどこぞ家さがして、親子揃うて一つ竈の飯食へるものやつたら、と思はぬこととはござりませぬ。(おは)

これらは、意味においては、「同じ」という意味が強く感じられる。その理由として、複数の人間が「一つのモノ」に関わると、客観的には「同じモノ」に関わっているといえることが考えられる。この用法は、最近ではあまり使われなくなっているが、数「一」のもつ興味深い用法として指摘しておく。

おわりに

本論では、日本語において、もののかずをあらわす数詞が、様々なかたちを取り、それぞれ表す意味が異なるということを述べてきた。特に、数詞の〔特定のグループ示し〕という機能は、日本語における複数表現に関する問題とも絡んでくる要素を持ち(例えば、複数接尾辞といわれている「-たち」は、基本的にはヒト名詞につくが、モノ名詞にはつかず、さらに、「山田さんたち」のようなあるグループを示すはたらきをすることとの関連など)、興味深いところである。この調査研究は、数詞の用法にとどまらず、将来的には日本語における複数表現の用法とも絡めて、発展させたいと考えている。

先行研究

泉井久之助 (1978)『印欧語における数の現象』大修館書店

奥津敬一郎 (1986)「日中対照数量表現」『日本語学』8月号, 70-78, 明治書院

—— (1997)「連体即連用? ——数量詞移動——」『日本語学』10月号112-119, 11月号95-105明治書院

川端善明 (1964)「時の副詞 (上) ——述語の層について——」『国語国文』第33巻, 1-23

—— (1964)「時の副詞 (下) ——述語の層について——」『国語国文』第34巻, 34-54

—— (1967)「数・量の副詞 ——時空副詞との関連——」『国語国文』第36巻, 1-27

- 北原博雄（1994）「数量詞の連用修飾機能——数量詞と先行詞との関係——」日本文芸研究会第四十六回研究発表会発表要旨，1-10
- 佐治圭三（1969）「時詞と数量詞——その副詞的用法を中心として——」『月刊言語』12月号，157-165，大修館書店
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎（1999）『日本語の文法1999』講義テキスト
- 三原健一（1998）「数量詞連結構文と「結果」の含意（中）」『月刊言語』7月号，94-102大修館書店
- 森重敏（1958）「数詞とその語尾としての助数詞」『国語国文』第27巻，12-33
- 山田孝雄（1936）『日本文学概論』宝文館
- 吉川武時（1989）『日本語文法入門』株式会社アルク

資 料

- （1）赤川次郎『幽霊記念日』 文藝春秋 1995.2（幽霊）
- （2）阿刀田高『やさしい関係』 文藝春秋 1996.6（やさ）
- （3）嵐山光三郎『素人包丁記・海賊の宴会』 講談社 1996.7（素人）
- （4）嵐山光三郎『桃仙人』 筑摩書房 1997.12（桃仙）
- （5）泉麻人『コラムダス』 新潮社 1997.9（コラ）
- （6）泉麻人『地下鉄の友』 講談社 1995.12（地下）
- （7）伊集院静『兎がわらってる』 文藝春秋 1999.9（兎が）
- （8）井伏鱒二『山椒魚』 新潮社 1999.2（山椒）
- （9）宇野千代『おはん』 新潮社 1996.6（おは）
- （10）椎名誠『時にはうどんのように』 文藝春秋 1998.8（時に）
- （11）志賀直哉『和解』 新潮社 1986.3（和解）
- （12）下田治美『愛を乞うひと』 角川文庫 1998.12（愛を）
- （13）東海林さだお『駅弁のまるかじり』 文芸春秋 1999.5（駅弁）
- （14）さくらももこ『そういうふうにてきている』 新潮社 1999.7（そう）
- （15）高橋源一郎『ペンギン村に陽は落ちて』 集英社 1992.8（ペン）
- （16）太宰治『斜陽』 角川書店 1998.4（斜陽）
- （17）夏目漱石『ころも』 集英社 1999.6（ここ）
- （18）星新一『どこかの事件』 新潮社 1998.3（どこ）
- （19）松村友視『アブサン物語』 河出書房新社 1998.9（アブ）
- （20）三谷幸喜『オンリー・ミー 私だけを』 幻冬社 1998.2（オン）
- （21）三島由紀夫『美徳のよろめき』 新潮社 1999.10（美徳）
- （22）宮本輝『真夏の犬』 文芸春秋 1998.8（真夏）
- （23）宮本輝『生きものたちの部屋』 新潮社 1998.7（生き）
- （24）村上春樹『村上朝日堂 はいほー！』 新潮社 1992.5（村上）
- （25）群ようこ『無印良女』 角川書店 1995.5（無印）
- （26）山本周五郎『小説日本婦道記』 新潮社 1998.12（小説）
- （27）吉本ばなな他『中吊り小説』 新潮社 1998.5（中吊）
- （28）有島武郎『一房の葡萄』 角川文庫 1994.6（一房）

- (29) 遠藤周作『ユーモア小説集』 講談社文庫 1994.12 (ユー)
- (30) 川端康成『伊豆の踊り子』 新潮文庫 1988.5 (伊豆)
- (31) 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』 角川文庫 1997.5 (銀河)
- (32) 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』(上) 1996.5 (ダン)
- (33) 村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』(下) 1996.5 (ダン)

(投稿受理日：2002年 2 月28日)

(改稿受理日：2002年 5 月 2 日)

加藤 美紀 (かとう みき)

miki-kato@mub.biglobe.ne.jp

Grammatical usage of Japanese cardinal numbers

KATO Miki

Keywords

Numeral, cardinal, number, quantifier

Abstract

Japanese cardinal numbers have various kinds of grammatical usage. This paper aims to give an accurate a perspective as possible. My argument is based on careful observation and classification of 3500 examples of data taken from many novels by different authors. Japanese linguists so far have theoretically explained how Japanese cardinals function mainly adverbially. The view has been that cardinals are related to the predicate as modifiers to clarify the necessary number or quantity of items. This view undoubtedly illustrates one aspect of the issue. Yet there is another essential aspect that needs clarification. The most important point I would like to highlight is that , in Japanese sentences, numerals are closely related to the number or quantity of items shown as nouns, and words to indicate the number or quantity function as *kitei-go* (a kind of grammatical determiner), while also functioning adverbially at the same time.